

# 横沢Ⅱ遺跡

— 第2次発掘調査報告 —

1999年

立山町教育委員会

## 序

文化財は、先祖の営みを私たちに伝えてくれる語り部であり、過去だけではなく、現在の文化を理解するためにも重要なものです。中でも、埋蔵文化財はその土地に深く関係しており、郷土をよりよく知るための鍵であるといえましょう。

このたび調査の行われた横沢Ⅱ遺跡は、前回の第1次調査では縄文時代と古代の集落跡が発見され、古代集落については東大寺領大荊庄墾田図によって名前だけ知られている「川枯郷」との関連が注目されました。

今回の調査では中世の遺跡が見つかり、「高野庄」や近隣にある仏生寺城跡などとの関係を考えるうえで貴重な資料といえます。

この報告書がより多くの方々に活用され、地域の歴史と文化の理解に役立てば幸いです。

最後に、調査実施に当たり絶大なる御協力をいただいた(株)森崎と、御指導・御援助いただいた富山県埋蔵文化財センターをはじめとする地元や諸方の皆様に、衷心より感謝申し上げます。

平成11年3月

立山町教育委員会

教育長 堀 田 實

## 例　　言

1. 本書は富山県中新川郡立山町横沢地内及び同郡舟橋村古海老江地内において株式会社森崎が実施した開発事業に先立つ、横沢Ⅱ遺跡の第2次発掘調査報告である。
2. 調査は株式会社森崎の委託を受け、立山町教育委員会と舟橋村教育委員会が実施した。
3. 現地調査は平成9年7月22日～平成9年10月29日までの延51日間に行った。その後、報告書作成は平成11年3月31日までに行った。発掘面積は約3,200m<sup>2</sup>である。
4. 調査事務局は立山町教育委員会に置き、社会教育課主事三鍋秀典が事務を担当、社会教育課長奥村忠彰が総括した。なお、舟橋村地内の箇所に関しては、舟橋村教育委員会が調査事務を担当、同教育委員会の依頼を受けて立山教育委員会が現地調査及び報告書作成を実施した。
5. 調査担当者は、立山町教育委員会社会教育課主事三鍋秀典と立山町教育委員会臨時調査員新本真之、同中島義人である。
6. 調査にあたり、富山県教育委員会文化課・富山県埋蔵文化財センターから有益な御教示をいただいた。また、中世の土器については高慶孝氏（上市町教育委員会）に御教示をいただいた。記して謝意を表します。
7. 遺物の注記は「T Y Z II - 2」とし、次にグリッド名・層位・日付の順に付した。
8. 遺物整理・実測・製図は三鍋・新本・中島・越野由香（立山町教育委員会嘱託）が中心となり、田中幸生（富山大学大学院生）、三浦知徳（富山大学学生）が協力した。
9. 本書の編集・執筆は、三鍋・新本が担当した。

## 目 次

I 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	1
II 調査に至る経緯.....	1
III 調査概要.....	4
1. 立地と層序.....	4
2. 遺構.....	4
3. 遺物.....	8
IV 調査成果.....	20
参考文献	
写真図版	

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡.....	2
第2図 調査区区割図.....	3
第3図 調査区全体図.....	付団
第4図 遺構実測図.....	5
第5図 遺構実測図.....	6
第6図 遺物実測図.....	9
第7図 遺物実測図.....	10
第8図 遺物実測図.....	11
第9図 遺物実測図.....	12
第10図 遺物実測図.....	14
第11図 遺物実測図.....	15
第12図 遺物実測図.....	16
第13図 遺物実測図.....	17
第14図 遺物実測図.....	19

## 図 版 目 次

図版 1	遺跡周辺航空写真 昭和41年撮影
図版 2	1. 調査区全景（東から） 2. 調査区全景（上から）
図版 3	遺物写真
図版 4	遺物写真
図版 5	遺物写真
図版 6	遺物写真
図版 7	遺物写真
図版 8	遺物写真
図版 9	遺物写真

## I 遺跡の位置と周辺の遺跡

立山町は富山県の東南部に位置し、立山連峰に源を発する常願寺川によって形成された、広大な扇状地上に拓けた町である。西は富山市、東は長野県大町市に接し、東西約43km、南北約20km、面積は308km<sup>2</sup>である。

地勢は、三角州や扇状地から河岸段丘・丘陵・溶岩台地さらには山岳高地までおよぶ多様な地形が、標高約10mから3,000mにかけて展開している。東南部には立山を主峰とする北アルプスの山々が連なり、中央部はそこから続く山地丘陵もしくは河岸段丘、北西部が平野部である。

このため、自然環境も変化に富んでおり、植生の面からは大きく4区分できる。

標高400m以下は、暖温帯の照葉樹林帯に属し、かつて重要な食料資源であったカシ類が多い。

これに続いて標高600m～700mまでは暖温帯の落葉樹林帯に属し、カシ類にまさる食料資源であるクリ・コナラ・クヌギ類の成育帶で、シカ・イノシシ・ウサギ等の動物たちが育つ場でもある。

さらに標高1,500mまではブナ類の茂る冷温帯落葉樹林帯、1,500m以上は寒温帯針葉樹林帯となっている。

舟橋村は富山平野のはば中央、常願寺川扇状地の扇端部に位置し、標高は10～23mと平坦で、北と西は富山市、南は立山町、東は上市町に接し、面積は3.47km<sup>2</sup>と県内最小の自治体である。

今回調査を行った横沢II遺跡の周辺一帯は、地形的には常願寺川扇状地の扇端部にあたる。遺跡は、現在の横沢集落の北西に位置し、立山町と舟橋村にまたがって所在する。

周辺には縄文時代から中・近世に至るまで、ほぼ切れ目なく遺跡が存在する。

これらの遺跡の中で、今回調査を行った遺跡に関連あるものとしては、曾我遺跡（縄文）・利田横枕遺跡・日水遺跡・鉢ノ木I遺跡・横沢I遺跡（縄文～近世）、五郎丸遺跡（縄文・古代～近世）、利田堀田遺跡・利田高見遺跡（古代～中世）、総曲輪遺跡（古代～近世）などがあげられる。

## II 調査に至る経緯

遺跡のある横沢地区は、縄文時代の遺構・遺物が存在する地区として『立山町史』に記載されている。

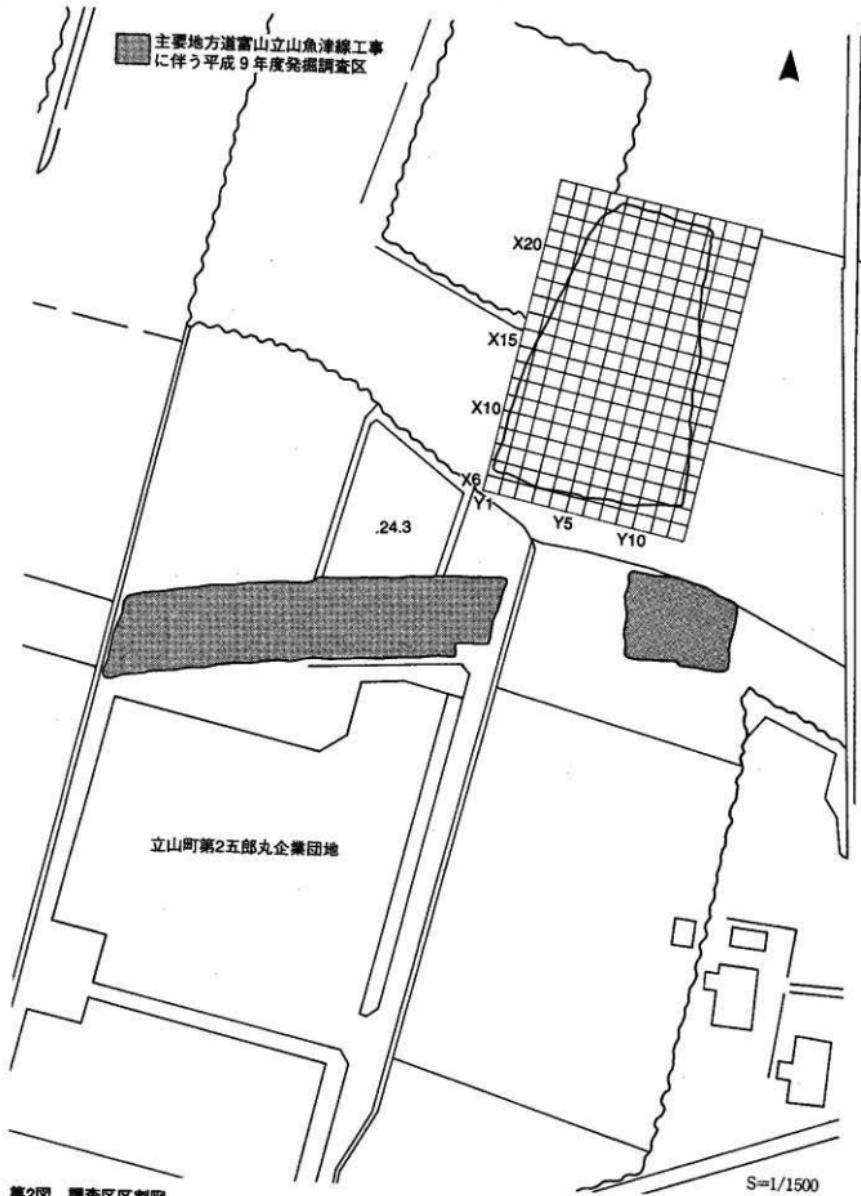
平成8年度に㈱森崎の開発工事の申請を受けて立山町教育委員会が試掘調査を行った。試掘調査では、柱穴や溝跡などの遺構・遺物を多数検出した。

この調査をふまえ、立山町教育委員会と㈱森崎が協議・調整を行い、予定地北側の緊急に開発の必要がある区域を対象として、記録保存調査を実施することとなった。

発掘調査は、平成9年7月22日～10月29日の延51日間にわたって実施された。調査面積は約3,200m<sup>2</sup>である。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡  
1.横沢Ⅱ遺跡 2.横沢Ⅰ遺跡 3.五郎丸遺跡  
4.利田横枕遺跡 5.鉢ノ木Ⅰ遺跡 6.日水遺跡  
7.利田堀田遺跡 8.利田高見遺跡 9.総曲川遺跡



第2図 調査区区割図

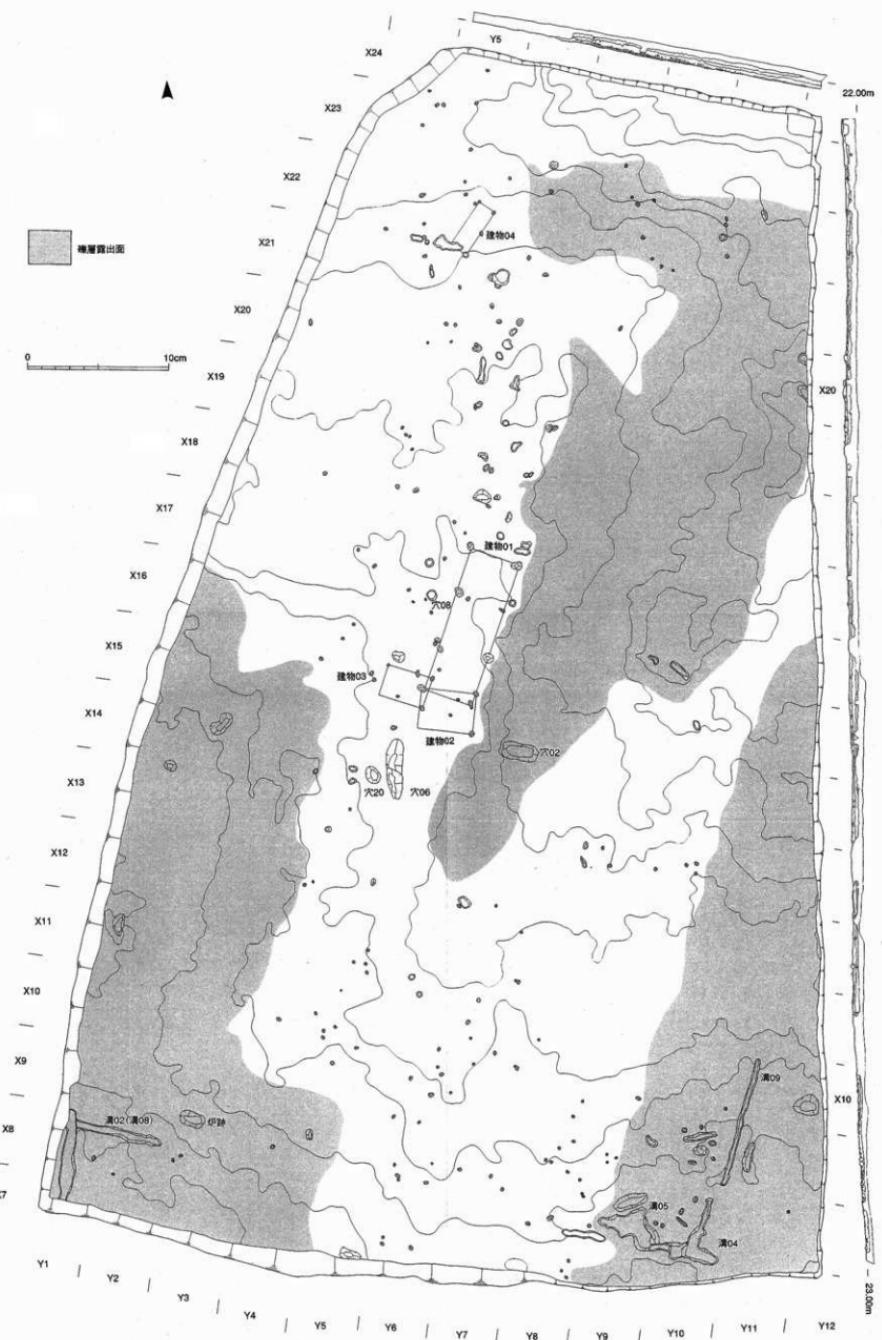


图3 四号区全图

### III 調査の概要

#### 1. 立地と層序（第2・3図）

横沢II遺跡は、富山地方鉄道越中舟橋駅の南2km、立山町横沢から舟橋村古海老江にかけて所在する。一带は、常願寺川扇状地の末端部湧水地帯にある。遺跡の東側一帯には高野川・柄津川などの中小河川が流入して、小支谷・自然堤防等の複雑な地形を形成している。

遺跡は常願寺川・高野川によって形成された微高地に立地する。遺跡の規模は、昭和62年に実施された分布調査で南北250m、東西200mの広がりをもつことが確認されており、標高は約24~25mを測る。今年度調査対象地区は遺跡の北東隅にあたり、周辺は水田として利用されていた。

層序は基本的に、第1層・耕作土および擾乱、第2層・砂礫を含む黒褐色土、第3層・黒及び暗褐色土、第4層・礫層をベースとする黄褐色土（=地山）の順序で堆積する。これらの土層のうち第2層及び第3層から遺物が出土しており、これらの層が遺物包含層である。

遺物の出土状態は、遺構から良好な状態で検出し得たものは少なく、包含層からの出土が多い。

#### 2. 遺構（第3~5図）

##### 建物-01

調査区の中央やや西側で、1間×3間の南北棟掘立柱建物を検出した。建物方位は、南北柱列でとるとN-21°-Eをさす。柱間寸法は、桁行が東側柱列では北から3.4m・3.5m・3.5m、西側柱列では3.2m・4.0m・3.1mを測り、梁行は3.7mを測る。柱掘方は不揃いで、径45~80cmの隅丸方形、円形、梢円形、不整形をなし、深さは11~33cmを測る。なお、P2とP6は深さが10cm余りと他の柱穴に比べて極端に浅く、各々に近接した深さ30cm余りのP8とP10が柱穴である可能性が残る。遺物は、P3から土師質小皿（第10図31）が出土しており、時期は16世紀代と考えられる。

##### 建物-02

建物-01の南端と重複して検出した、1間×1間の東西棟掘立柱建物である。P1を建物-01のP5と共用するが、建物の新旧関係は不明である。建物方位は、東西柱列でとるとN-82°-Wをさす。柱間寸法は、桁行が3.8m、梁行は2.9mである。柱掘方は、長径40~66cmの梢円形をなし、深さは13~26cmを測る。遺物は出土していない。

##### 建物-03

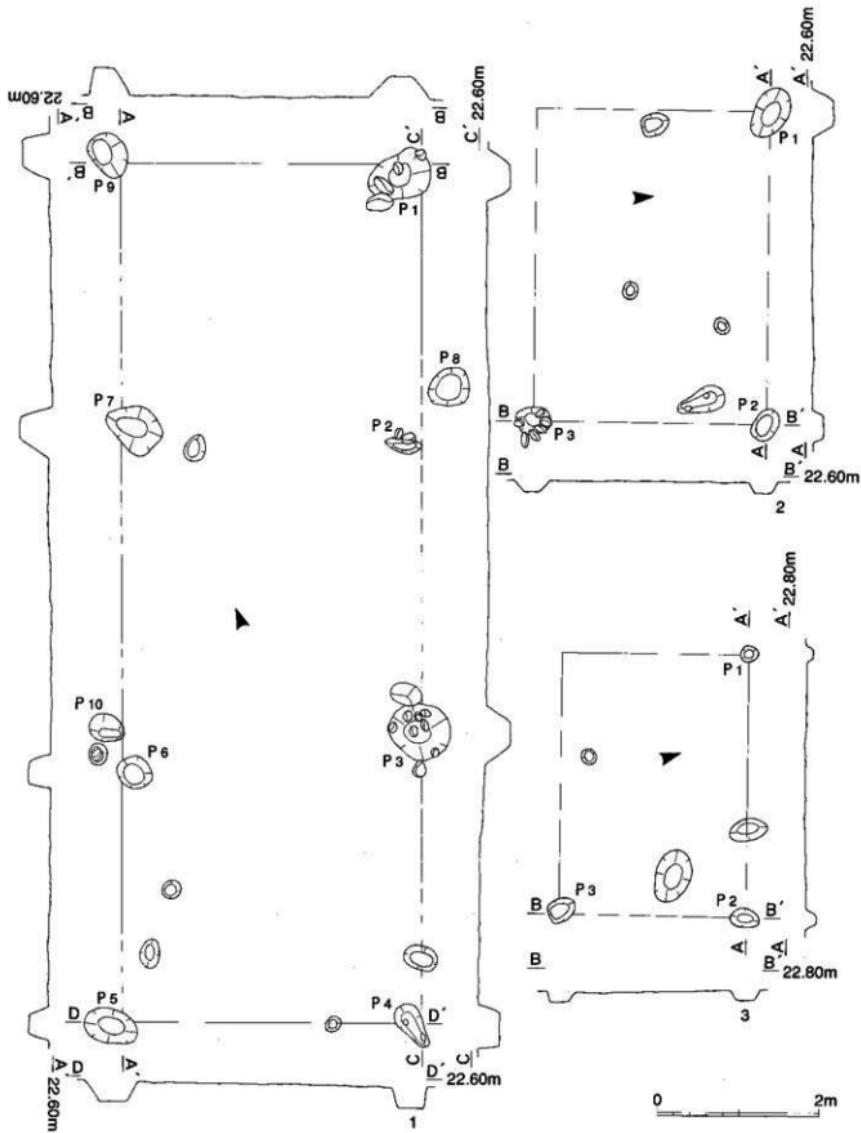
建物-01の南西端と重複して検出した、1間×1間の東西棟掘立柱建物である。建物方位は、東西柱列でとるとN-71°-Wをさす。柱間寸法は、桁行が3.2m、梁行は2.3mである。柱掘方は、径22~37cmの円形、梢円形をなし、深さは8~13cmと極端に浅い。遺物は出土していない。

##### 建物-04

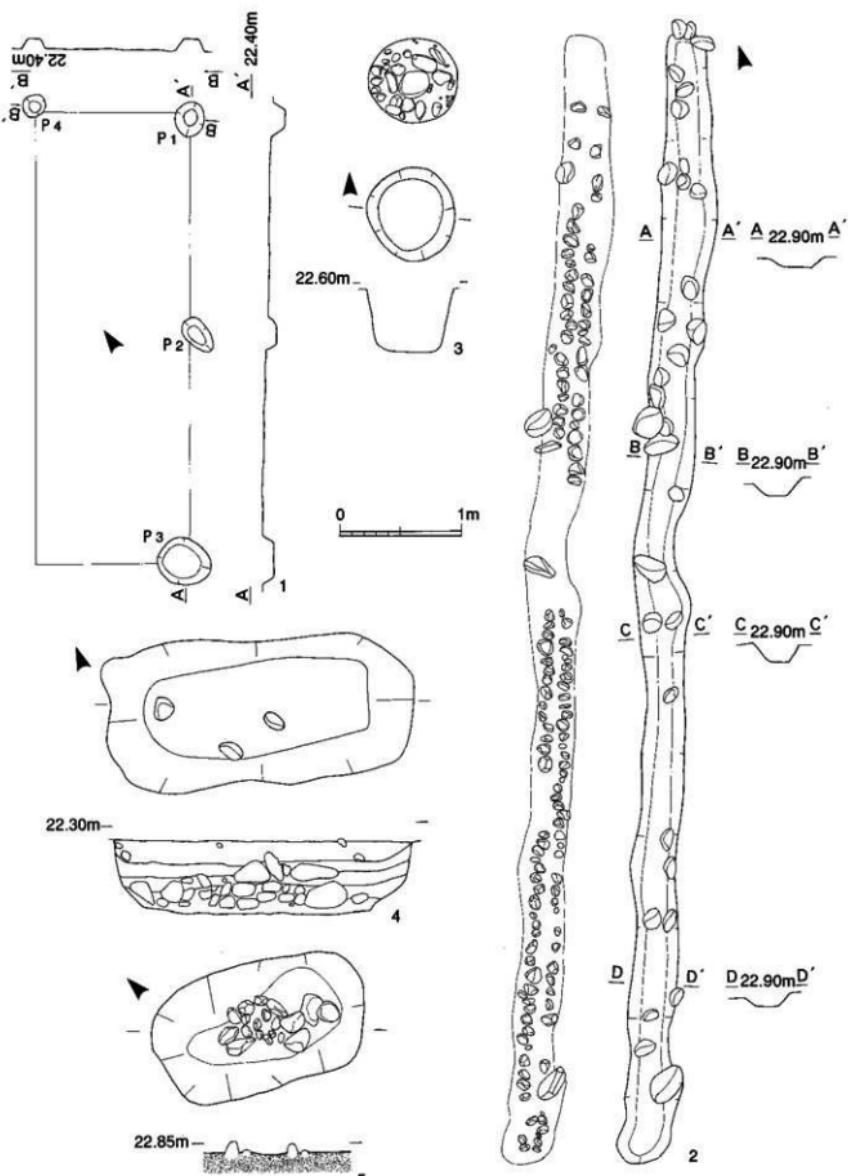
調査区の北東やや西側で検出した、1間×2間の東西棟掘立柱建物である。建物方位は、東西柱列でとるとN-71°-Eをさす。柱間寸法は、桁行が3.2m、梁行は2.3mである。柱掘方は、径22~37cmの円形、梢円形をなし、深さは8~13cmと極端に浅い。遺物は出土していない。

##### 溝-02

調査区の南西隅で検出した溝で、X 8 Y 2区から調査区西側外へと延びている。幅は45~80cmを測り、底面は平坦で広く、深さは5~10cmと浅い。溝-08とは重複しており、覆土の状態や出土遺物から、この溝-02が古いと考え



第4図 遺構実測図 1. 建物-01 2. 建物-02 3. 建物-03



第5図 造構実測図 1. 建物-04 2. 溝-09 3. 穴-08 4. 穴-02 5. 炉跡

られる。遺物は、底から打製石斧（第7図12）が出土している。

#### 溝-04

調査区の南東隅で検出した溝で、X 8 Y 10区からX 7 Y 10区へと延びたL字型の平面プランを持つ。幅は35~108cmを測り、深さは幅の狭い北側が17cmと深く、幅の広い南側は8cm前後と極端に浅くて平坦な底面形状を呈する。底面や側面に人頭大の石を意識的に配した模様が見られる。覆土は灰褐色砂質土の単層で、多量の箸（第13図58~67）が出土している。

#### 溝-05

溝-04の西側で検出した溝で、長径4m、短径2.6mの不整形の平面形態をなす。底面は平坦で広く、深さは5~10cmと浅い。溝-04と同様に底面に人頭大の石を意識的に配した模様が見られ、溝-04から05へと続く一連の穴・溝で圍池を形成していた可能性が高い。覆土は灰褐色砂質土の単層で、遺物は縄文土器（第6図3）と漆器（第14図77）が出土しているが、縄文土器は流入したものと考えられる。

#### 溝-06

溝-02とほぼ重複して検出した溝で、覆土の状態や出土遺物から、この溝-06が新しいと考えられる。覆土は、溝-04・05とよく似た灰褐色砂質土の単層で、箸（第13図68~70）が多く出土している。

#### 溝-09

溝-04の北側で検出した、長さ92m・幅32~48cm・深さ5~15cmの溝で、南北には一直線に伸びる。溝の覆土表面には、拳大前後の大きさの石が2列に直線的に並び、建物軒下の雨落溝の様な景観を呈している。このため、周辺を精査したが、この溝に伴うと思われる建物や柱穴は検出できなかった。

#### 穴-02

調査区のほぼ中央で検出した。隅丸長方形の平面形態をなし、長辺2.5m・短辺1.2m・深さは41cmを測る。覆土は、上2層は黒褐色土をベースにした土層、下2層は灰褐色土をベースにした土層で、下層には大量の石が充填しており、底面は広く平坦である。埋葬関係の遺構である可能性が高い。遺物は越中瀬戸焼（第12図54・56）が出土しており、時期は17世紀代と考えられる。

#### 穴-06

調査区の中央やや西側で検出した。紡錘形の平面形態をなし、長辺2.3m・短辺1.1m・深さは47cmを測る。覆土は灰褐色土の単層で炭化物が多めに混入している。遺物は縄文土器（第6図4）が出土しており、時期は縄文時代後期後半と考えられる。

#### 穴-08

建物-01の西側で検出した。長辺76cm・短辺70cmという円に近い梢円形平面形態をなし、上面中央には長辺30cm弱の扁平な石を置いて周囲に多量の石を充填しており、井戸の廃棄に伴う儀礼かと思われる。ただ、深さが53cmと浅く湧水面には達していないため、溜め池の可能性もある。遺物は出土していない。

#### 穴-20

穴-06の西側で検出した。梢円形の平面形態をなし、長辺1.3m・短辺1.0m・深さは12cmを測る。覆土は灰褐色土の単層で、底面は平坦である。遺物は縄文土器（第6図8）が出土しており、時期は縄文時代後期後半と考えられる。

#### 炉跡

調査区の南西隅、X 8 Y 3区で検出した石組炉である。北西-南東方向に主軸を持ち、長辺70cm、短辺は約45cmと

推定する。周囲を精査したが、豎穴住居の掘方や柱穴などは検出できなかった。炉内から炭化物が殆ど出土せず、周辺にも熱を受けた痕跡が殆ど見られないため、使用されたのはごく短期間と考えられる。遺物は出土していない。

### 3. 遺物（第6～14図）

#### (1)縄文時代の遺物（第6～9図）

##### A 後期の土器（第6図1～8）

1は小突起の付く平縁深鉢で、口縁部はやや開き気味に直立する。口縁部に隆帯の長方形区画を配し、その区内をさらに沈線によって2段の長方形に区画する。隆帯上には繩文と連続した斜位の刻みが施され、沈線区画内には連続した斜位の刻みが施される。井口式期の後半に比定できる土器である。

2～8は平縁深鉢で、後期後半に属するものと考えられる。

2は口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁上部には無文帯を巡らせ、その下には右下がりのRL縄文の上から幅広の横位平行沈線を2条巡らせる。

3は溝-04からの出土品で、口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁上部には無文帯を巡らせ、その下には右下がりのRL縄文が施される。

4・5は開き気味に立ち上がった口縁部がわずかに外反するもので、口縁上部には無文帯を巡らせ、その下には左下がりのLR縄文が施される。4は穴-06から、5は遺物包含層からの出土品であるが、同一個体の可能性が高い。

6は口縁部が斜め上方へ直線的に立ち上がるもので、口縁上部には無文帯を巡らせ、その下には左下がりのLR縄文が施される。

7も口縁部が斜め上方へ直線的に立ち上がるもので、口縁上部には無文帯を巡らせ、口縁部には右下がりの、胴部には縱位のLR縄文が施される。

8は穴-20からの出土品で、口縁部が内湾気味に立ち上がり、口縁上部には無文帯を巡らせ、その下には左下がりのRL縄文が施される。

##### B 晩期の土器（第6図9～11）

9は口縁部が内湾気味に立ち上がる波状口縁深鉢で、沈線区画内を磨り消して玉抱き三叉文を施している。御経塚式に比定できる土器である。

10は口縁部が直線的に立ち上がるもので、口唇部に面が取られている。横方向の条痕調整を施す。晩期後半に属するものと考えられる。

11は深鉢底部で、外面には縦方向の条痕調整が施され、底面にはスダレ状圧痕が残る。内面上部には炭化物が付着する。晩期後半に属するものと考えられる。

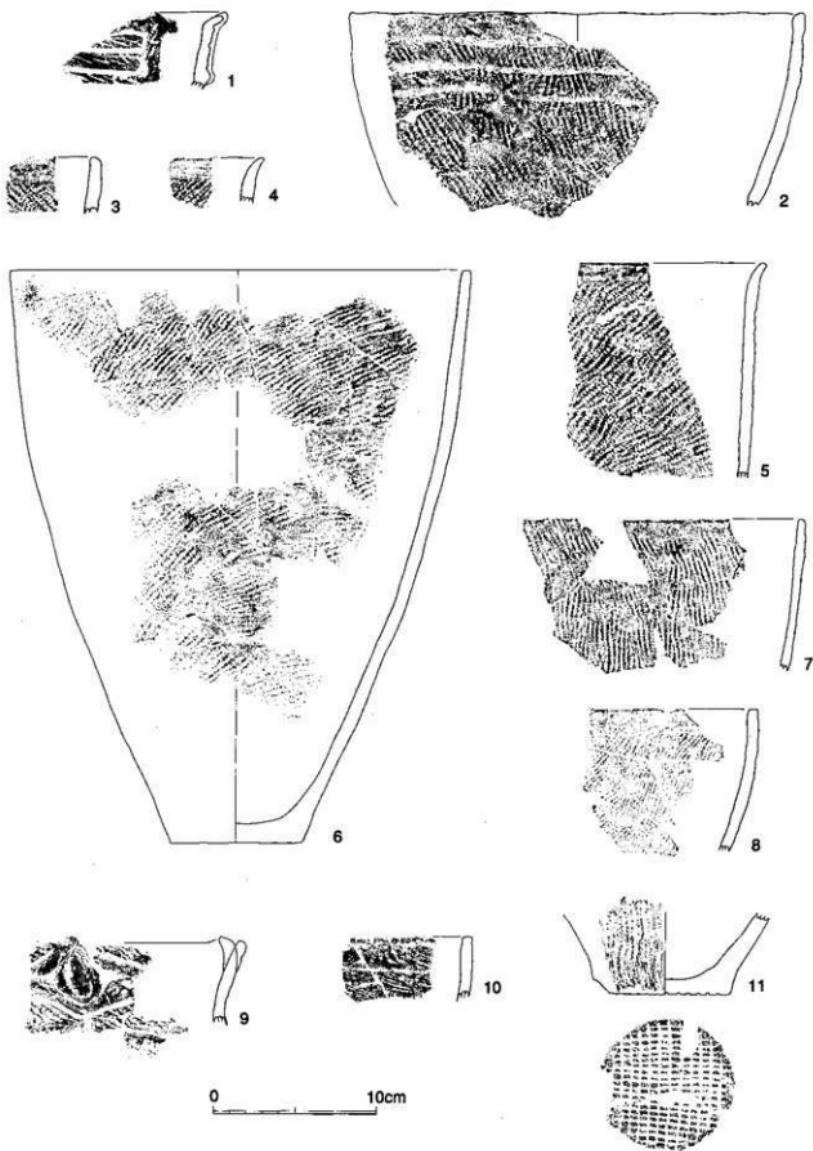
##### C 石器（第7～9図）

出土した石器は打製石斧のみで、12が溝-02から出土した他は全て遺物包含層からの出土品である。

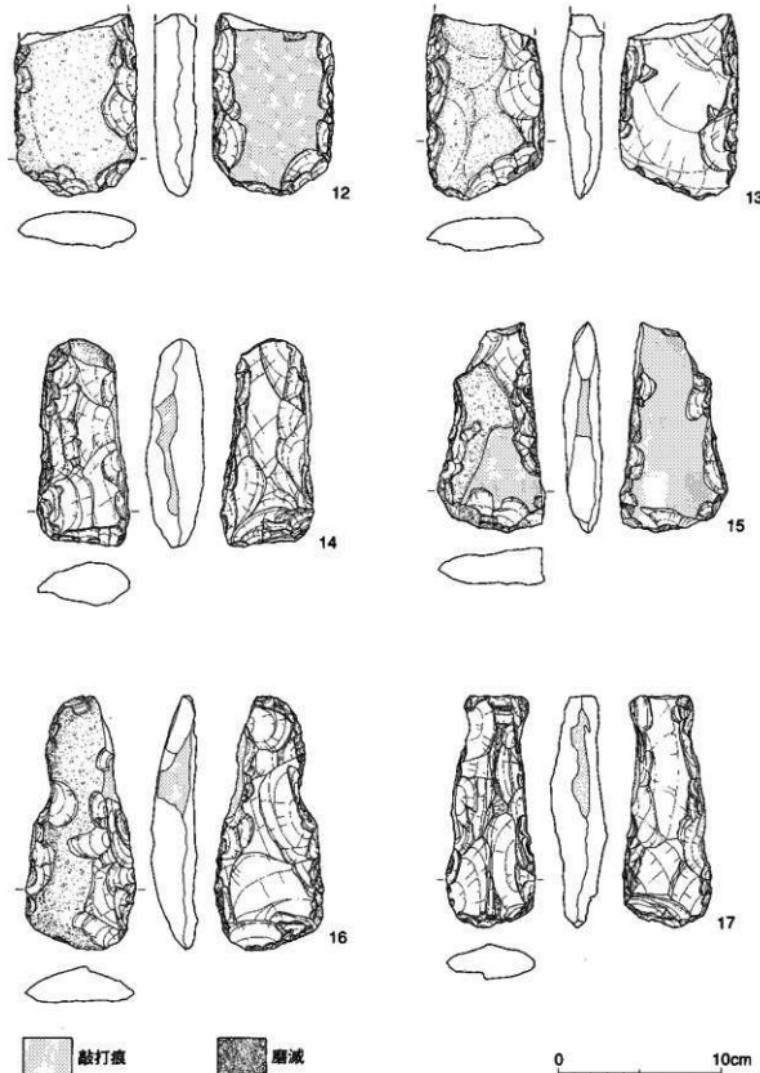
形態的に次の4種に分類した。すなわち、第7・8図のものは平面形態から短冊形・撥形・分離形の3種に分け、第9図のもののものは刃部の断面形態で一括した。

12～14は短冊形に分類されるものである。12・13は基部を欠損しており、最大厚は2.5cmと扁平で、背面に大きく縛面を残す。完形品は14のみで、長さ12.5cm、最大幅5.7cm、最大厚3.5cm、重量295gを測る。石材は12・13が砂岩、14が凝灰岩である。

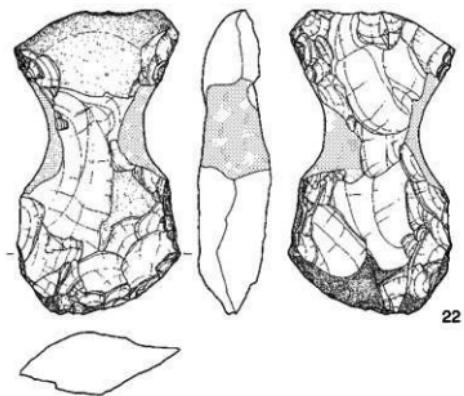
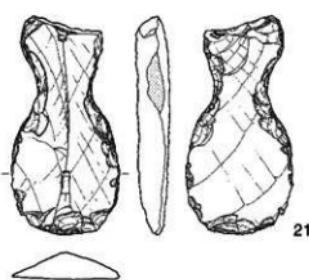
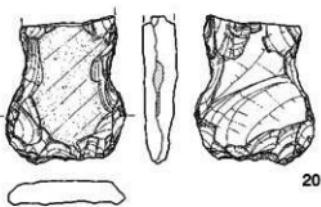
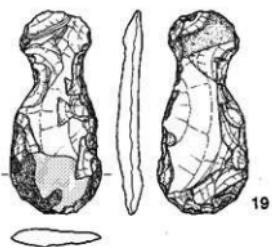
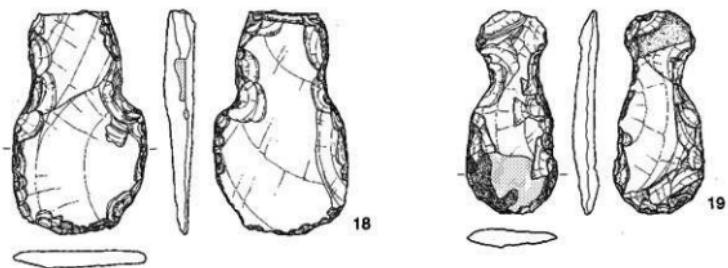
15～17は撥形に分類されるものである。15・16は扁平な素材を用い、背面を大きく縛面を残す。15は基部を欠損し



第6図 遺物実測図 3. 溝-04 4. 穴-06 8. 穴-20 その他. 包含層



第7図 遺物実測図 12. 滝-02 その他、包含層



敲打痕

磨滅

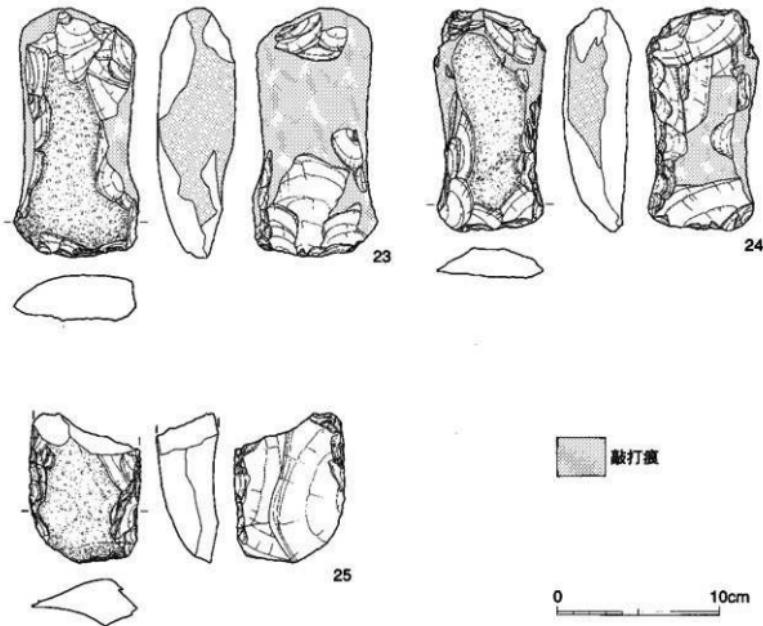
0 10cm

第8図 遺物実測図 包含層

ているが意図的な整形による可能性があり、長さ12.6cm、最大幅6.6cm、最大厚2.2cm、重量216g。16は長さ15.6cm、最大幅6.7cm、最大厚2.8cm、重量296g。17は長さ14.2cm、最大幅5.4cm、最大厚3.2cm、重量270gを測る。石材は全て砂岩である。

18~22は分銅形に分類されるものである。18~21は扁平な素材を用いている。20は基部を欠損しており、背面に大きく礫面を残す。18は長さ13.6cm、最大幅8.2cm、最大厚1.8cm、重量220g。19は長さ12.5cm、最大幅5.5cm、最大厚1.3cm、重量109g。21は長さ12.9cm、最大幅6.6cm、最大厚2.0cm、重量184g。22は長さ18.5cm、最大幅9.9cm、最大厚4.5cm、重量883gを測る。石材は18・20・21が頁岩、19が砂岩、22は流紋岩である。

23~25は、敲打による楕円形の断面形態を呈し、片刃の刃部をもつもので、県内ではあまり見られない形状の打製石斧である。いずれも背面には大きく礫面を残す。23は長さ15.3cm、最大幅7.6cm、最大厚4.8cm、重量769g。24は長さ13.6cm、最大幅6.5cm、最大厚4.0cm、重量493g。25は基部を欠損するが、最大幅6.8cm、最大厚3.8cmを測る。石材は23が安山岩、24・25が砂岩である。



第9図 遺物実測図 包含層

(2)中世以降の遺物 (第10~14図)

A 青磁 (第10図26)

龍泉窯系と考えられる碗の破片で、遺物包含層からの出土である。外面に蓮弁文を施し、内面下端には陰刻らしき痕跡がわずかに残る。釉はオーリーブ色で透明、貫入が入る。13~14世紀代のものと考えられる。

B 土師皿 (第10図27~34)

全て手捏ねの皿で、34が建物-01・P3から、他は遺物包含層からの出土である。全て口縁部に一段ナデを施し、27~29は13~14世紀、30~34は16世紀代のものと考えられる。

C 珠洲焼 (第10図35・36、第11図)

壺・片口鉢・擂鉢がある。全て遺物包含層からの出土である。

壺 (第10図35・36)

壺の体部破片で、外面に平行叩き痕、内面に当て具痕が残る。外面の3cm当たり平行叩き条数は、35が13条でⅡ~Ⅲ期、36が9条でⅣ期頃のものと考えられる。

片口鉢 (第11図37)

体部は直線的に外傾し、口縁端部に水平に面を取る。Ⅲ期のものと考えられる。

擂鉢 (第11図38~42)

38・39は直線的に外傾し、口縁端部には水平に面を取る。38は口縁端部の外面をわずかにひきだす。~1单位の卸し目を数えられるものは、39が2.1cmの原体に7条、40が3cmの原体に9条である。41は原体の幅・条数は不明であるが、残存部分では1cmに3条を数える。38はⅣ期、39~42はV~VI期のものと考えられる。 (三鍋)

D 肥前系陶磁 (第12図43・44)

43は表採、44は遺物包含層からの出土である。

43は、磁器碗で、やや直線的に立ち上がる体部と、若干くびれる口縁部を持つ。外面には、体部に草花文を描き、端部に一重圓線を描く。

44は、陶胎染付の碗で、全体に厚手の体部と丸くおさめる口縁端部を持つ。外面には口縁部に、変型した四方擇文を描く。体部にも文様が描かれるが、何文であるかははっきりしない。

43は18世紀後半~19世紀前半、44は18世紀後半のものと考えられる。

E 越中瀬戸 (第12図45~57)

45・46・51は表採、54・56は穴-02から、他は遺物包含層からの出土である。

碗・皿・壺・水注・匣鉢・鉢がある。

碗 (第12図45~47)

45は鉄釉を施す丸碗で、若干内湾しつつ立ち上がる体部と、内外をシャープに仕上げることで端面を形成する口縁部を持つ。

46は鉄釉を施す丸碗で、削り出し高台を持つ。

47は内面に灰釉を、外面に鉄釉をかけ分ける丸碗で、貼り付け高台を持つ。

皿 (第12図48~51)

48は灰釉を施す丸皿で、若干外反する口縁部を持つ。口縁部付近を中心に焼きが悪く、部分的に釉が剥落している。

49は灰釉を施す丸皿で、削り出し高台と外反する口縁部を持つ。内ハゲであり、外底面も無釉である。



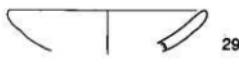
26



27



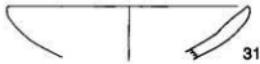
28



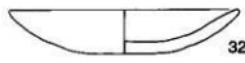
29



30



31



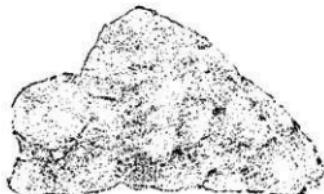
32



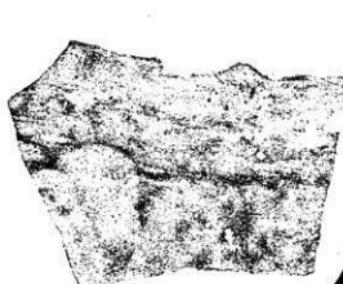
33



34



35



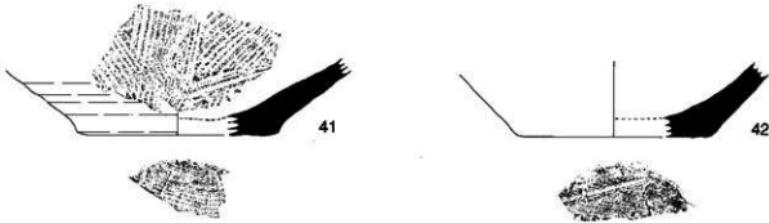
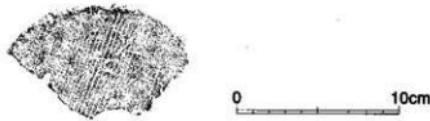
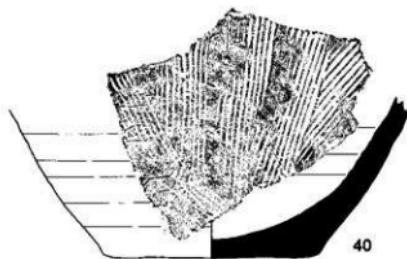
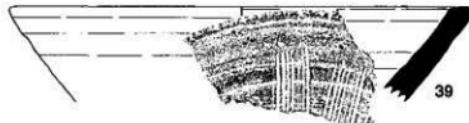
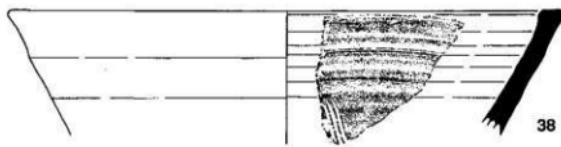
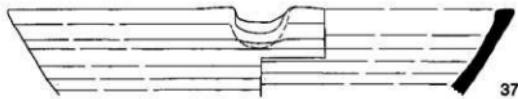
36



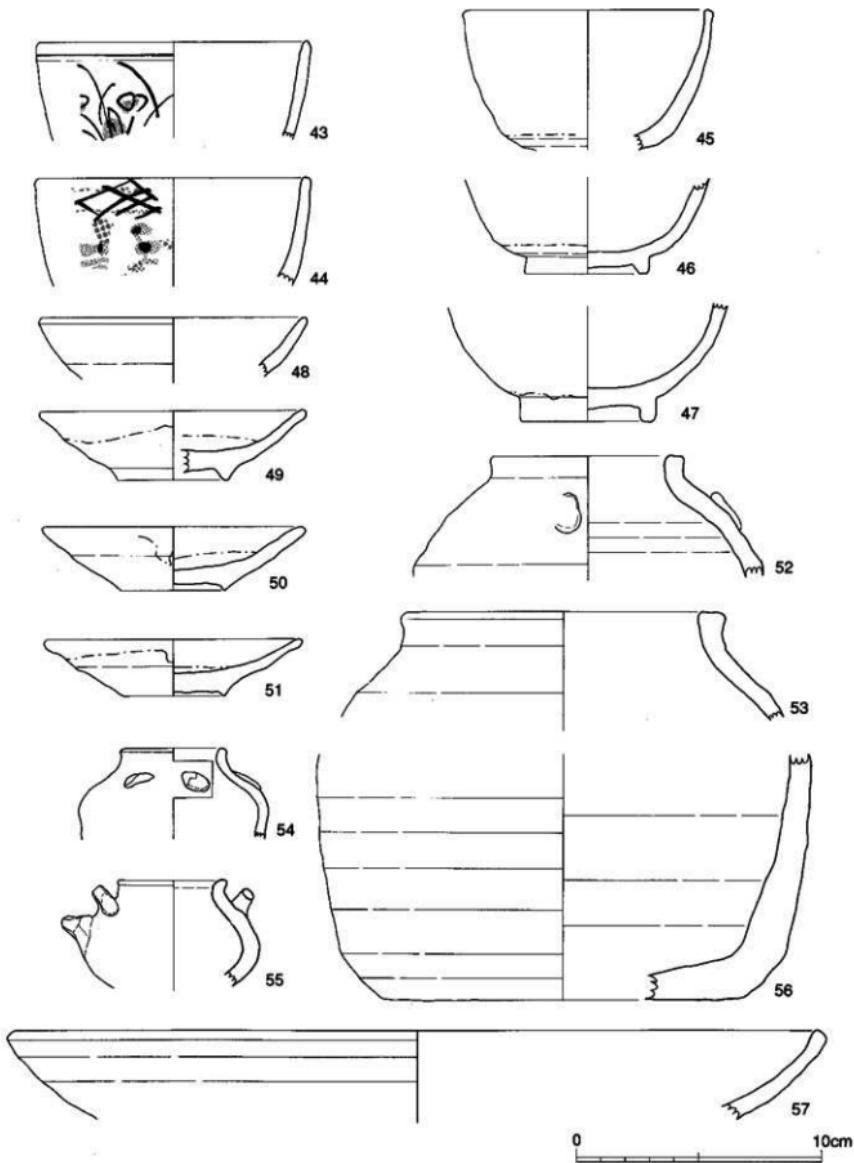
0

10cm

第10図 遺物実測図 31. 建物-01・P3 その他、包含層



第11図 遺物実測図 包含層



第12図 遺物実測図 54・56. 穴-02 その他、包含層

50は鉄釉を施す丸皿で、削り込み高台と外傾する口縁部を持つ。内ハゲであり、外底面も無釉である。

51は鉄釉を施す丸皿で、削り込み高台と外傾する口縁部、玉縁状の口縁端部を持つ。内ハゲであり、外底面も無釉である。

壺 (第12図52・53)

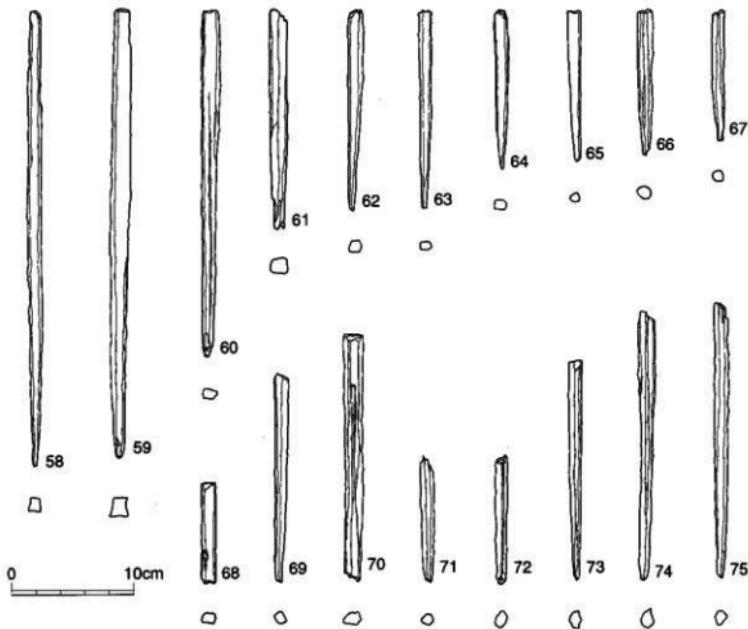
52はサビ釉を施す短頸の壺で、体部上位に耳を持つ。

53はサビ釉か、鉄釉を施す短頸の壺で、端部に比べてややくびれる頸部を持つ。全体に生焼けのため、釉の剥落が目立つ。

水注 (第12図54・55)

54は鉄釉を施す水注で、薄手の器壁とやや直立気味の体部を持つ。

55は鉄釉を施す水注で、やや強く外反する体部を持つ。体部への穿孔が不十分であり、注口部へつながっていない。



第13図 遺物実測図 58・59・60・61・62・63・64・65・66・67. 溝-04 68・69・70. 溝-08 その他. 包含層

### **匣鉢** (第12図56)

56はサビ釉を施す匣鉢で、糸切り底を持つ。全体に生焼けのため、釉の剥落が目立ち、製品焼成時の痕跡などは見られない。

### **鉢** (第12図57)

57は灰釉を施す鉢で、薄手の体部と内側に折り返す口縁端部を持つ。全体に生焼けである。

いずれも17世紀～18世紀代のものと考えられる。

(新本)

### **F 木製品** (第13・14図)

溝や包含層から多量の木製品が出土している。形態から大別すると、生活・生産用具(箸・漆器・曲物)、祭具(人形)、用途不用品に分けられる。以下、この分類に従って述べる。

#### **箸** (第13図58～75)

小片を加えて20点余り出土したが、58～67は溝-04から、68～70は溝-08からと、大部分が遺構から出土している。完成品は3点で、18cm余のもの(58・59)と、14cm余のもの(60)がある。側面を面取りした後、一方の端を先細りに削る。中央部の断面は、四角形・隅丸方形・不整な円及び梢円形を呈する。

#### **漆器** (第14図76・77)

76は側部上半を欠くが口径16cm前後と推定される大ぶりの椀で、高台は3cmと高く、漆は全体的に塗りが薄くて遺存状態も悪いが、内外面ともに黒色漆塗りの上から赤色漆で文様が描かれていた可能性が高い。77は溝-05から出土した皿で、内外面ともに黒色漆塗り、底部の外縁に凹線を入れ、中央部は浅く削って擬高台を作り出している。

#### **曲物** (第14図84・85)

いずれも曲物の側板である。84には継ぎ革の残欠が見られ、85の上縁面には結合用の木釘痕と考えられる小穴がほぼ等間隔に残る。

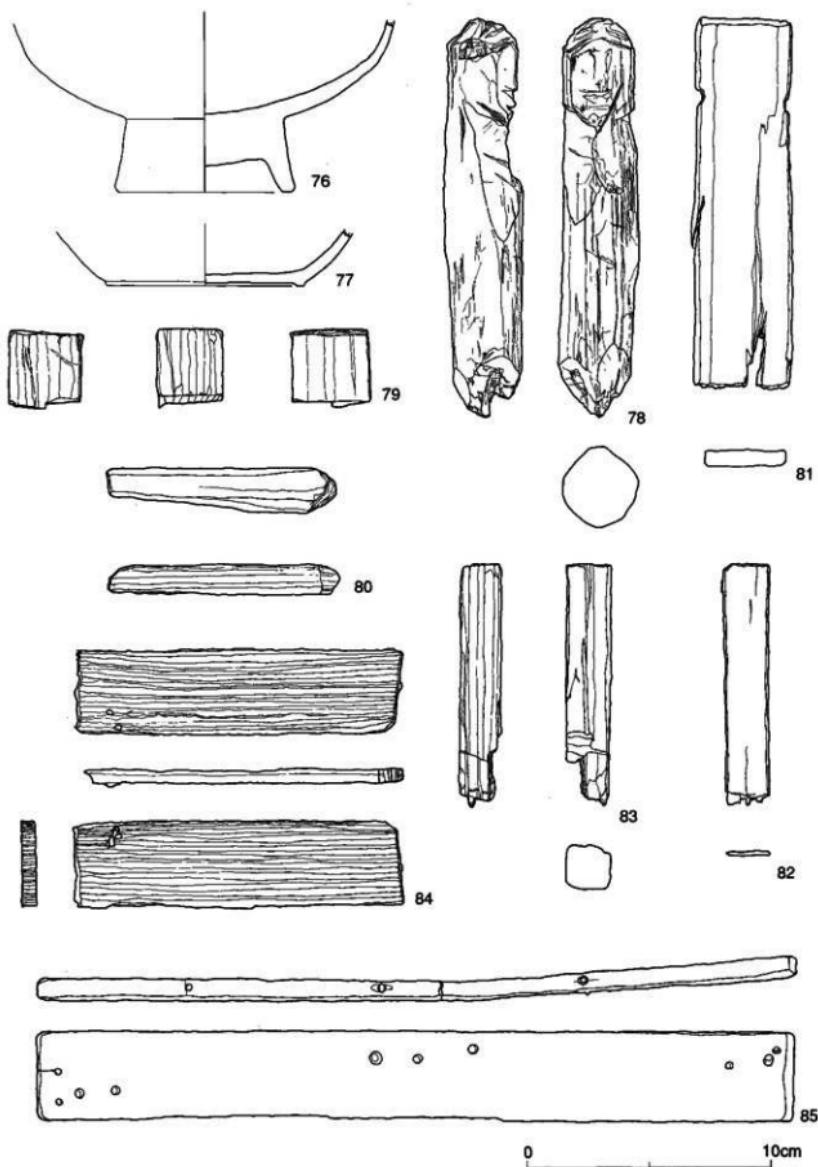
#### **人形** (第14図78)

八角形に近い断面の材の上部に人面を彫刻しているが、未完成品と思われる。下端は尖らせてあり、杭からの転用品と考えられる。

#### **用途不用品** (第14図79～83)

82・83が溝-01からの出土である。いずれも、何らかの部材と考えられる。

(三鋼)



第14図 遺物実測図 77. 溝-05 82・83. 溝-01 その他. 包含層

## IV 調査成果

今回の調査では以下の新知見が得られた。

①縄文時代については、遺構・遺物ともに少なく、遺構から出土した遺物はわずか4点にすぎない。土器は滑川市本江遺跡のものと類似点が多く、石器では片刃の刃部を持つ打製石斧の存在が注目される。遺物から後期後半に盛期があった可能性が考えられる。

②掘立柱建物は、調査区中央と北側から計4棟検出した。建物-01は1間×4間の規模で、時期は柱穴出土遺物から中世末に属すると考えられる。建物-02は1間×1間の規模で、柱穴を建物-01と共用することから、建物-01に後続する時期と推定する。建物-03は1間×1間の規模で、遺物は出土していないが、いずれの柱穴も浅く小さいことから、この建物の存続期間はごく短かったものと考えられる。建物-04は、1間×2間の規模で、遺物が出土しておらず時期は不明である。

③中・近世の遺物も遺構から出土したものは少なく、遺物包含層からの出土が大多数を占める。青磁・土師皿・珠洲焼・肥前系陶磁・越中瀬戸などがあり、時期は13~14世紀代と16世紀以降とに分かれる。遺構にからむ遺物は13~14世紀代のものが多く、建物-01、溝-04から溝-05へと続く一連の穴・溝で形成されていた可能性のある池、溝-09などがこの時期に属するものと考えられる。

以上に、第1次調査（主要地方道工事に伴う平成9年度発掘調査）で得られた知見を合わせると、次の通りとなる。

1. 横沢Ⅱ遺跡は、縄文時代後半から晩期、古代（8~9世紀）、中世（13~15世紀）の各時期に営まれた集落跡の複合遺跡である。

2. 縄文時代では、後期後半の井口式期から八日市新保式期にかけて盛期があった可能性が考えられ、隣接する五郎丸遺跡が晩期の御経塚式期から中屋式期にかけて盛期をもつ事と合わせて考えると、一帯には後期後半から晩期にかけて集落が営まれており、その集落は時期によって場所を移していたものと推定される。

3. 古代の遺物は7~10世紀代のものがあるが、8~9世紀に盛期がある。「和名抄」や「新川郡大前村墾田地図」（正倉院蔵）に見られる「川枯郷」を、当遺跡の所在する地区に比定する考えは古くからあり、「川枯郷」かその周辺集落の可能性がある。

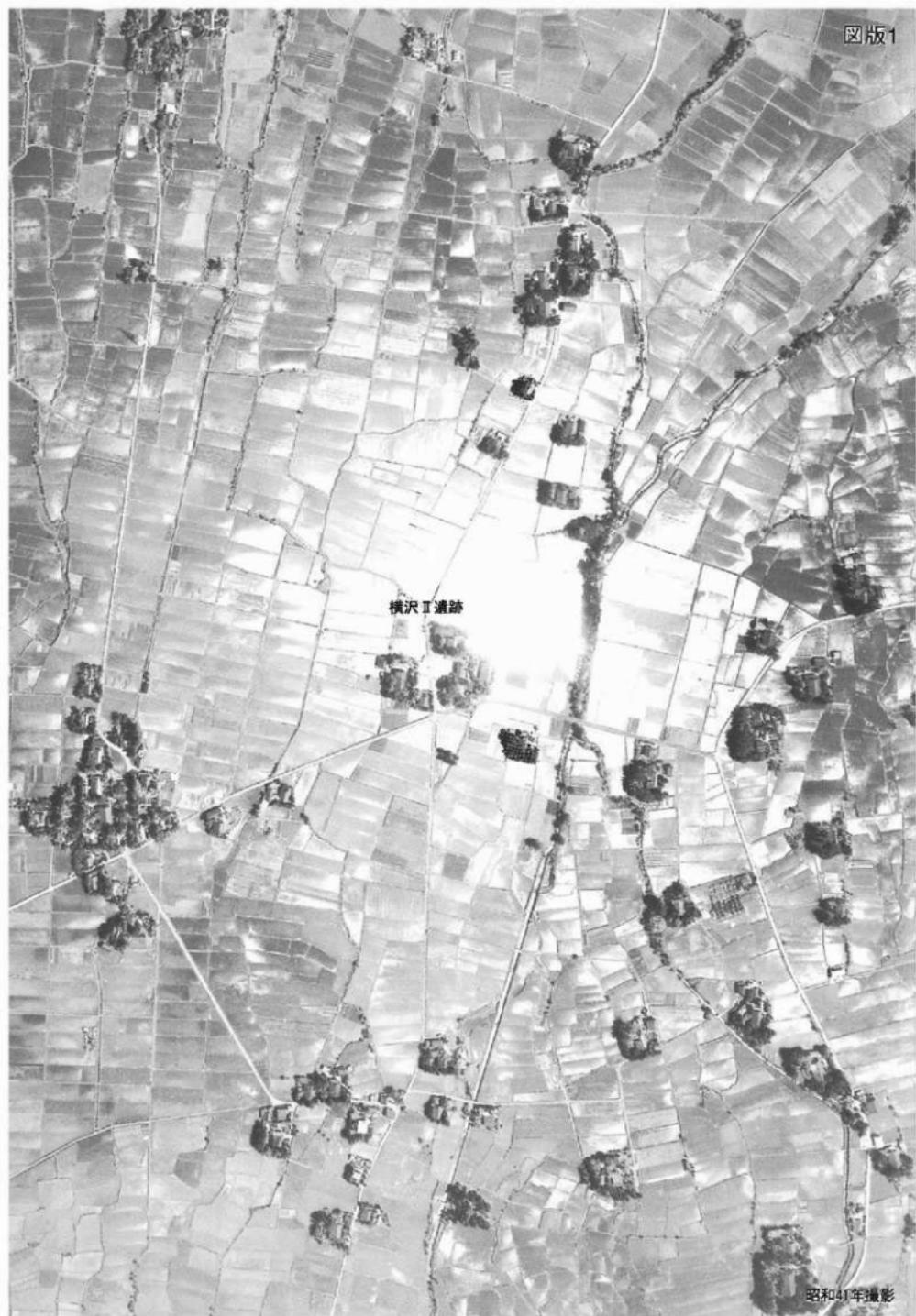
4. 中・近世については、遺物は12世紀~19世紀代まで存在するが、遺構は12~14世紀を中心とする。

横沢Ⅱ遺跡の所在する立山町北部一帯から舟橋村にかけての地域は、中世には三条家領庄園である「高野庄」の庄域内であり、室町時代には「高野七郷」とも称されていた。文明17年（1485）9月20日の『室町幕府奉行人連署奉書案』によると、「高野細河」が市田郷（現富山市水橋一帯か）を押領しており、この時期細川（細河）氏が高野庄を中心とした地域に勢力を有していたことが知られる。周辺の中世遺跡としては、細川氏の居城である仏生寺城跡が北北東2kmに、その支城である竹内館跡が北2.5kmに所在する。また、南700mにある日水村は、天正年間（1573~92）に上杉勢に敗れた仏生寺城主細川越中守の家臣が開村したと伝える。

以上から推定すると、横沢Ⅱ遺跡は「高野庄」の庄域内に営まれた村であり、現在までに調査された地区に限って言えば、後の仏生寺城主細川氏に関係した有力者の居住地であった可能性が考えられよう。ただし、周辺の同時代遺跡の調査は未だ少ない為、これ以上の推論は差し控える。今後の調査の進展を待ちたい。

## 参考文献

- ア 有田町 1988 「有田町史」古窯編
- イ 石川県埋蔵文化財センター 1989 「金沢市米泉遺跡」
- 井口村教育委員会 1980 「井口村遺跡発掘調査概要」
- カ 河西健二 1992 「中世末から近世の建物跡」「埋蔵文化財年報（3）」（財）富山県文化振興財団
- 河西健二 1993 「五社遺跡調査で思ったこと」「埋蔵文化財年報（4）」（財）富山県文化振興財団
- 金沢市教育委員会・石川県鉄鋼団地協同組合 1992 「金沢市中屋サワ遺跡」
- 上市町教育委員会 1984 「弓庄城跡－第4次緊急発掘調査概要－」
- コ 小島俊彰 1979 「本江遺跡」「滑川市史」考古資料編
- シ 定塚武敏 1980 「珠洲古陶－越中における展開－」
- ス 鈴木道之助 1991 「石器入門事典 繩文」 柏書房
- 珠洲焼資料館 1989 「珠洲の名陶」
- セ 濑戸市史編纂委員会 1993 「瀬戸市史」陶磁史篇四
- タ 立山町 1977 「立山町史」上巻
- 立山町教育委員会 1978 「富山県立山町埋蔵文化財予備調査概要」
- 立山町教育委員会 1987 「辻遺跡・浦田遺跡発掘調査概要」
- 立山町教育委員会 1991 「辻遺跡－第2次発掘調査報告書－」
- 立山町教育委員会 1995 「五郎丸遺跡」
- 立山町教育委員会 1998 「横沢Ⅱ遺跡」
- 立山町教育委員会・富山大学人文学部考古学研究室 1988 「立山町埋蔵文化財分布調査報告書」Ⅲ
- ト 土岐市教育委員会 1993 「鷺居表1・2号窯跡発掘調査報告書」
- 富山県埋蔵文化財センター 1991 「北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編6－境A遺跡土器編」
- 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会 1993 「珠洲大畠窯」
- ナ 永峯光一 1981 「中部・北陸地方」「縄文土器大成4」 講談社
- ノ 能都町教育委員会・真脇遺跡発掘調査団 1986 「真脇遺跡」
- ヘ 平凡社 1994 「富山県の地名」
- ホ 北陸中世土器研究会 1992 「中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器」
- 北陸中世土器研究会 1995 「中世北陸の木製容器」
- マ 埋蔵文化財研究会 1996 「古代の木製食器」
- ミ 宮田明 1995 「富山市岩瀬天神遺跡出土の縄文土器について」「富山市考古資料館紀要」第14号
- 宮田進一 1988 「越中瀬戸の窯資料（1）」「大境」第12号 富山考古学会
- 宮田進一 1994 「掘立柱建物」「梅原護摩堂遺跡発掘調査報告」遺構編（財）富山県文化振興財団
- モ 森薫 1900 「庭園」日本史小百科 東京堂出版
- ヨ 吉岡康暢 1983 「珠洲系陶器の曆年代基準資料」「北陸考古学」石川考古学研究会



図版2

1. 調査区全景  
(東から)



2. 調査区全景  
(上から)



図版3

遺物写真  
遺物包含層



## 図版4

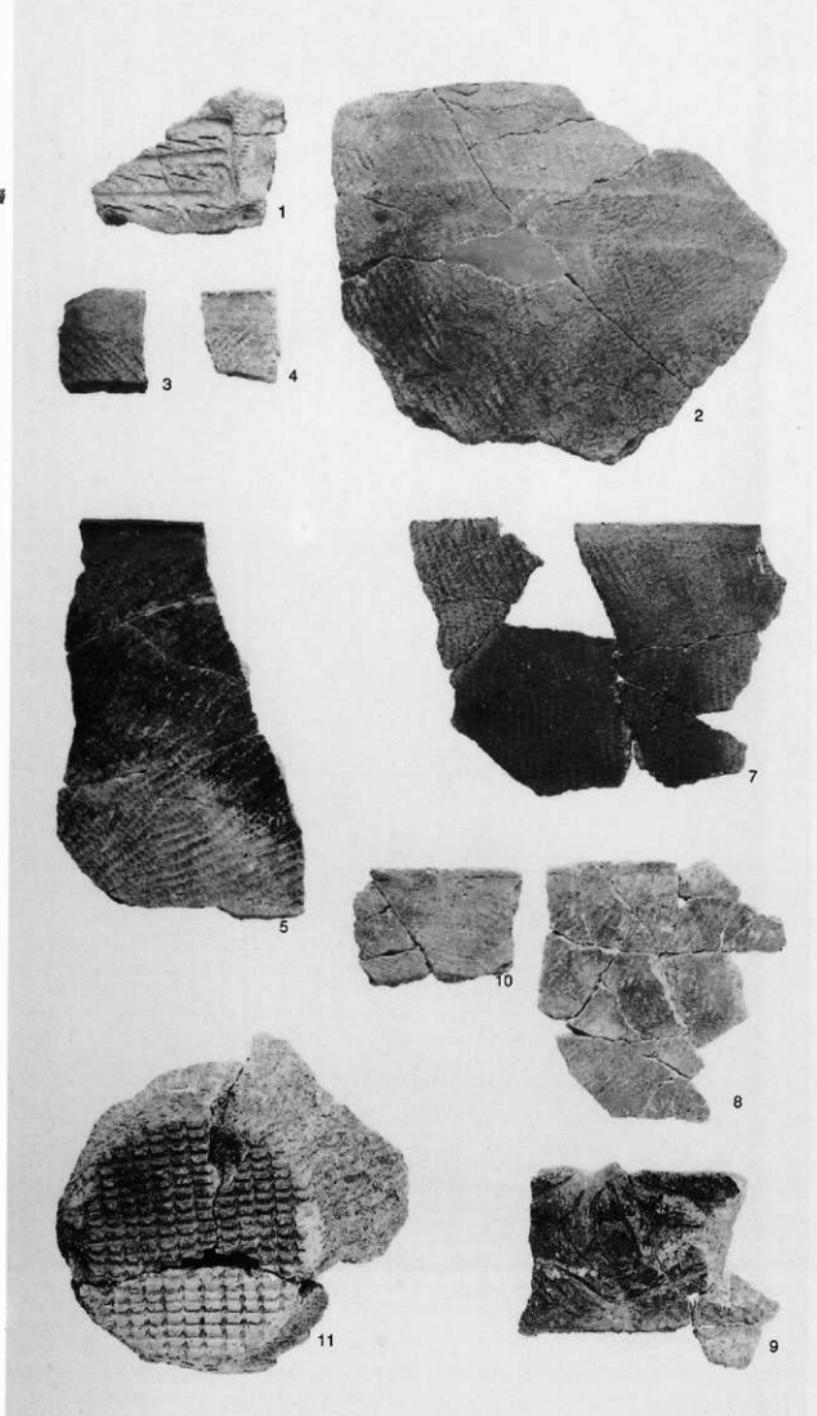
遺物写真

3. 滝-04

4. 穴-06

8. 穴-20

その他、遺物包含層



図版5

遺物写真

12. 溝-02

その他。遺物包含層



12



13



14



16



17



15



18



19



22



20



21

## 図版6

遺物写真  
遺物包含層  
(上が表面、下が裏面)



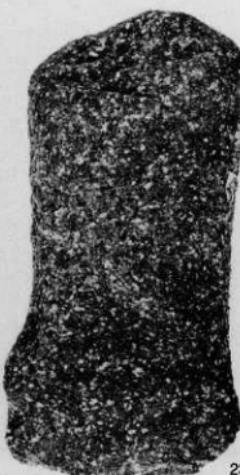
23



24



25



23



24

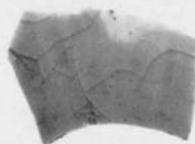


25

## 図版7

### 遺物写真

34. 建物-01・P3  
その他。遺物包含層



26



29



28



27



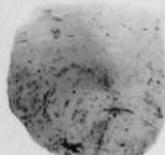
34



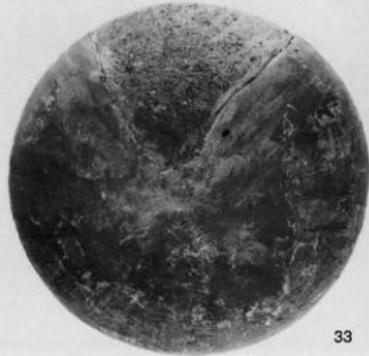
32



31



30



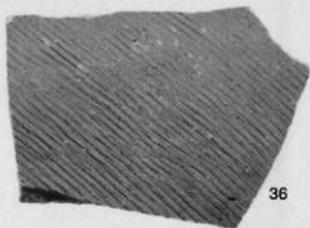
33

図版8

遺物写真  
遺物包含層



35



36



37



41



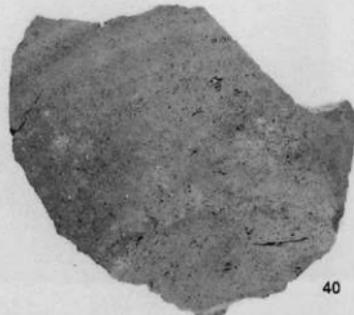
38



42



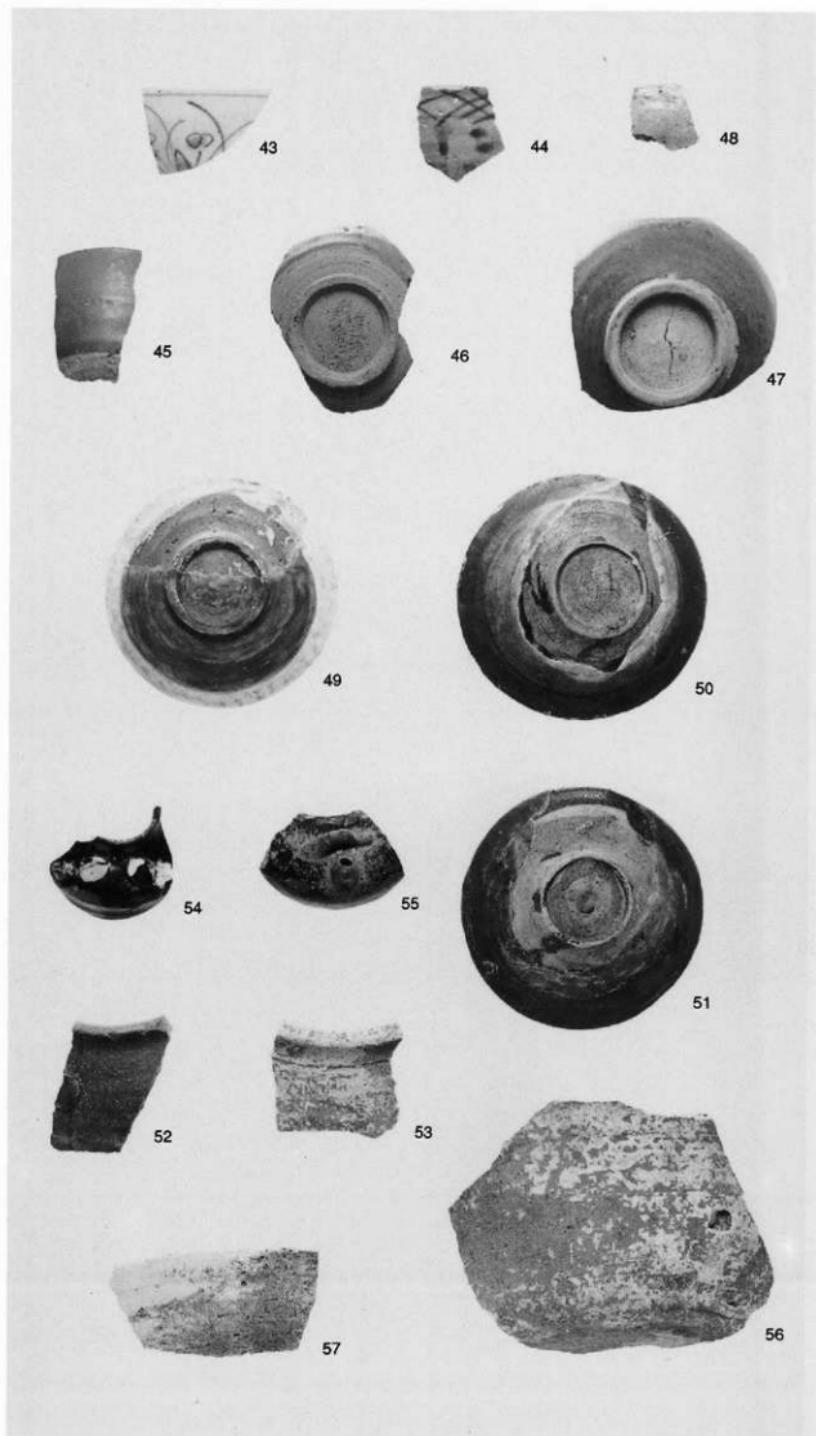
39



40

## 図版9

遺物写真  
54・56. 穴一02  
その他、遺物包含  
層・表探



## 報告書抄録

ふりがな	よこざわにいせき						
書名	横沢II遺跡						
副書名	第2次発掘調査報告						
編集者名	三鍋秀典・新本真之						
編集機関	立山町教育委員会・舟橋村教育委員会						
所在地	〒930-0292 富山県中新川郡立山町前沢2440番地 TEL 076 (463) 1121						
発行機関	立山町教育委員会						
所在地発行	〒930-0292 富山県中新川郡立山町前沢2440番地 TEL 076 (463) 1121						
発行年月日	西暦1999年3月						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北°, 輪 遺跡番号	東°, 経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
横沢 II	富山県中新川郡 立山町横沢8-1外	323	014	36° 41' 2"	137° 18' 20" ~	19970722 19971029	民間の工場・ 事務所建設に 伴う
		321	012				
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
横沢 II	集落跡	縄文・中世・近世	掘立柱建物・穴・溝	縄文土器・土師皿・珠洲焼・ 越中瀬戸			

### 横沢 II 遺跡

#### 第2次発掘調査報告

立山町文化財調査報告書第28冊

発行日 平成11年3月31日

編集・発行 立山町教育委員会

舟橋村教育委員会

印刷 (有)日本海印刷

